
とある野球少年の異世界目録

澄風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある野球少年の異世界目録

【Zコード】

Z0565BA

【作者名】

澄風

【あらすじ】

エクスリーグの世界大会決勝戦後に起きた真の最終決戦から数年。元ビクトリー・フィンチーズのエース・小波栄一は年下の恋人・天月紗矢香と共に学校へ登校していると、路地でガンダーロボとその持ち主であるカメダと出くわす。運が悪く时空転移に巻き込まれた二人が辿り着いた次の世界、そこは学園都市と呼ばれる超能力者を育成する場所だつた。

プロローグ（前書き）

作者はド素人です。独自解釈やキャラの性格が違つたりするかもしれませんが、この世界は無限にある平行世界の一つ何だと思つてください。

プロローグ

エクスリーグ世界大会決勝戦後につた真の最終決戦から数年。

俺こと小波栄一は高校生になり、今も大好きな野球を続けていた。

世界一の野球選手になるという夢を叶えるべく現在はフインチーズで一緒にやった幾人かの仲間たちと共に、高校球児全員の夢の舞台である甲子園を目指して猛練習に励んでいた。

そして今日も俺は朝早くから田を覚まして野球の朝練へと向かおつとしていた。

「それじゃあ、行つて来るよー。湯田父さんー、山田父さん！ 落田父さん！」

玄関で運動靴を履きながらリビングの方へ挨拶をすると、俺が父さんと呼ぶ眼鏡を掛けた三人の中年男が姿を現す。

エプロンを掛けた母親代わりの湯田が、

「行つてらつしゃいでやんす！」

「車に気を付けるでやんす！」

ワギリ製作所の黄色いヘルメットに水色の作業着姿の山田が、

兄貴分とも言える迷彩柄の軍服姿の落田が、

「帰つたらオイラが造つた新たな特訓用具を試すでやんすからねー。」

元気な声でいつも俺を見送ってくれる三人の父親に手を振つて答えると、いつも通り俺は鞄などの荷物を持って走り始める。

・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・

俺の家は町から遠く離れた山奥にある。

家を建てた三人の父親曰く『秘密基地は男のロマンで昔からの夢だつたでやんすー』との事だが、山奥に建つてゐる故に町までかなり遠い。

幼い頃から自転車などを使う事を禁じられており、ずっと走つて通学いるせいと今では慣れて信じられない位にスタミナが付いている。

慣れた坂道を走つて下り、いつも通り練習に間に合つ様に走るペースを上げて調節していると、学校の近くにあるコンビニの前で一人の少女を見つけた。

まだ中学生位で、背に流れる紫がかかった長い黒髪に大きく澄んだ涼しげな瞳。

可愛いといつよりも美人といつ言葉が相応しい秀麗な顔立ちで、清楚な神桜女学院中等部の白と青のセーラー服姿は、今では絶滅寸前と言われている大和撫子を思わせる。

「紗矢香！」

小波に名前を呼ばれた少女・天月紗矢香はこちらに気付くと物静かそうな雰囲気とは打って変わって、可愛らしい笑顔を浮かべてこちらに走つて来る。

長年の付き合いで次にどうなるのか知つてている小波は苦笑しつつ両手を広げ、

「栄一さん！」

抱き付いて来た紗矢香を抱きとめた。

「おはよう、紗矢香」

「おはようございます。栄一さん！」

笑顔で挨拶をし合う二人。

その姿はどう見ても恋人同士にしか見えない。

実際に二人は両親公認の三歳離れた恋人同士である。

つい最近までは「お兄ちゃん」と小波を呼んでいたが、今では「お兄ちゃん」では恋人らしくないという理由で「栄一さん」と呼んでいる。

「こんな早朝に会つなんて珍しいね」

「はい！栄一さんと会えるなんて早起きして良かつた！」

体を離して向かい合い、両手を頬に当てて赤らめながら嬉しさを表す紗矢香。

その仕種は山田父さんが働いているワギリ工場の浅井漣を思わせる。

「今日も野球の練習なの？」

「うん、まあね。夏の大会も近いし」

「野球部のトースだもんね。甲子園・・・必ず応援に行くから！」

「気が早いよ、まずは地区大会の強豪に勝たないといけないからな」

同じ地区にいる暁大付属の井石遼の事を思い浮かべる。

嘗て世界で一番最初に魔球を投げた小波に対し、世界で二番目に魔球を投げた井石は当初、小波にライバル宣言してきた自称ライバルであったのだが、とある事情で小波が所属していたフィンチーズに加入して共にチームの主力としてフィンチーズを世界一へと導いた男である。

小中で果たせなかつた雪辱を果たすべく彼は小波とは別の高校へと

入学している。

間違いなく地区大会で立ちはだかる壁となるであろう事を彼の実力をよく知る小波は予感していた。

そんな小波を見て紗矢香は笑顔で、

「絶対大丈夫だよ! だつて栄一さんは世界一の投手なんだから!」

「ありがと、紗矢香。それじゃあ学校の近くまで一緒に行こうか」

「うん!」

小波は時間を確認すると歩き始め、その後を紗矢香は並んで歩く。

「それにしても今の世界は平和だよな、三年前になんな事が遭ったのに」

三年前に起きた謎の現象を思い返して呟くと、紗矢香も頷く。

「あんな事は一度と起きない方が良いに決まってるよ。でも何事も突然始まるものだからね・・・」

「それもそうだな」

二人並んで他愛の無い会話をしながら歩き、別れ道まで来た所で一人は立ち止まる。

「それじゃあ私はこっちだから・・・」

「うん、気を付けてね」

「はい。栄一さんも頑張ってください！」

紗矢香と別れ、彼女が道角を曲つて見えなくなると小波も時間を確認して遅れを取り戻すべく走り出そうとした瞬間

「きやああああああつーー！」

「紗矢香！？」

彼女の叫び声が聞こえて小波は彼女が向かつた方へと急いで走る。

「紗矢香！？びづした

思わず小波は言葉を失つた。

尻餅を付いている紗矢香も同様である。

二人が道角を曲がつて目撃した物、それは

つー？

「が、ガンドーロボだとーー！？」

そこには小波の父親達が大好きな夢の巨大ロボが倒れて道を塞いでいた。

「え、栄一さん！？」

尻餅を付いていた紗矢香が立ち上がり不安そうな顔で小波に駆け

寄り、彼は彼女をいざとなつたら守るべく前に立つ。

「何でこんな所にガンダーロボがあるんだ？」

「もしかしたら私の能力が関係してるのかも…………？」

「それは分からないよ。……とりあえず調べてみるか…………」

「

巨大ロボットを警戒しながら一人はジリジリと近寄る。

すると頭部のコックピットらしき場所のハッチが開いてダースベイダーみたいなコスプレをした一人の中年眼鏡男が現われた。

その男の姿を見た瞬間、一人は思わず言葉を失つた。

出て来た人物が小波の父親達にそつくりだつたからだ。

「イタタタタ・・・・酷い目に遭つたでやんす」

「やんすつて・・・・やつぱり父さん達の親戚か？」

「そうじゃないのかな？口調も姿もそつくりだし・・・・」

頭を押されてフラフラとしている男は何か酷い目に遭つたのかげつそりとしており、周りを見渡すと一人によつやく気付いた。

「ちょっと聞きたい事があるんでやんす。ここは何処でやんすか？」

「ここは神桜文学院の近くですけど・・・それが何か？」

男の質問に紗矢香が答えると、男はつんざりした様に大きな溜息を付いた。

「今度の世界は地球の日本でやんすか・・・」

「今度の世界つて事は・・・おじさんはもしかして異世界の人なんか?」

「むつ! ? オイラはおじさんではないでやんす! 時空の霸者カメダでやんす!」

「その時空の霸者がガンダーロボに乗つて何しに来たんだよ?」

「クククク、勿論世界征
　　じゃなくて新型のダブルオーガン
　　ダーテストでやんす」

「今明らかに世界征服つて言おつとしたよな、紗矢香?」

「確かに」

明らかに怪しそうなカメダをジト目で睨む二人は、カメダがいつどんな行動が起つても対処が出来るように準備する。

そして新たな世界での世界征服計画につまづきつつあるカメダは内心焦りながらもどうするか考える。

(仕方がないでやんす。たかが小僧と小娘如き口封じするでやんす!)

ポケットに手を突っ込んで一人に見えない様に遠隔操作用のリモコンを握り締めて迎撃ボタンを押す。

ダブルオーガンダーの黄色い複眼センサーが光を宿した瞬間
それに気付いた小波はボールを振り被つてカメダへと投げる。

「ライトニングボール！」

投げたボールは雷光を放ち、明らかに人間ではありえない球速で力
メダの腹部に直撃する。

「うー！？ でやんす・・・・」

カメダのダースベイダーみたいなボディーアーマーを粉碎してガク
ツと俯いて気絶すると、ボールはダブルオーガンダーのコックピット
内に転がる。

「やり過ぎじゃないかな？」

「大丈夫だろ、軟球で手加減もしたし」

気絶したカメダを心配そうに見つめる紗矢香を安心させる様に言う
と、小波と紗矢香はコックピットに近付いて入る。

「怪しきは闇せよつて落田父さんから言われてるからね」

「私も一応能力を使って、この人がドジを踏む様に確率を操作して
たから大丈夫だと思うけど・・・・」

気を失っているカメダのポケットからリモコンを取り出した小波は

何をしようとしていたのか確かめる。

すると、カメダはリモコンのあるボタンを押していた。

迎撃ボタンではなく、時空転移ボタンを・・・・・。

「はっ？・・・やばいーーー」から早く出るぞ紗矢香ーー？」

「は、はいー？」

嫌な予感がして小波は紗矢香の手を引いてコックピットから飛び出そうとするが、

『時空転移装置起動ボタンのONを確認。時空転移を開始します』

二人は一歩遅く、ダブルオーガンダーから発せられる光を浴びてこの世界から消失した。

・・・・・・・・・・・・

身体をシェイクされた様な気分の悪さと共に小波は目を覚ました。

最初に視界に入ってきたのは見知らぬ天井とこちらを覗き込む様に見ているロボットとバッタ人間。

ロボットの方は人型で昔の子ども受けアニメに出てくる様な、いかにもつて感じの古臭いデザインをしており、顔の部分には単眼センサーと口のみがある。

そしてバッタ人間の方は緑色のライダースーツに黄色のスカーフという格好をしており、正真正銘のバッタ顔の額には「3」と文字が入っている。

「おー起きたみたいだな坊主！」

ロボットが人間並みに饒舌に話しかけてくる。

「そうみたいでバッタ！博士に知らせてくるでバッタ！」

バッタ男が親しみのある笑顔で言つと、ドアを開けて部屋から出で行く音が聞こえた。

「・・・・・」は一体・・・そうだ紗矢香は・・・

全てを思い出して勢いよく身体を起こすがロボットに押し倒される。

「まだ調子が悪そだから寝てろ。お前と一緒にいたお嬢ちゃんなら隣の部屋で寝てるぜ」

「そ、そつか・・・良かつた」

ロボットに彼女の「安否」を聞かされてほっとすると、小波は何が起きたのか聞く事にした。

「色々と聞きたいんだけどいいか?」

「おつー答えられる範囲でならなー!」

「おつーは何処なんだ?」

「おつーは学園都市と呼ばれてる場所の第7学区にある黒野研究所だ

「学園都市?」

聞こ覚えの無い単語に小波は首を傾げる。

「簡単に言えばお前さんが居た世界じゃなく異世界なんだよ」

話して聞かせるよりも見せた方が早いと踏んだロボットは、ハンド型マニピュレーターで起用にカーテンと窓を開けて外の世界を見せる。

そこでヒカルが見たのは、自身が住んでいた場所とは比べ物にならないほどの大都市だった。

今小波がいる場所は高いビルの上から、学園都市が遙か彼方まで見渡せる。

「ま、よつーそ学園都市へ」

ロボットが肩を竦めて言ひが、小波はこれからビリビリと頭を押されて悩んでいた

プロローグ（後書き）

現在作者はパワポケシリーズを始めからやり直しています。
思えば14年間長かつたな。

第1話 超能力（前書き）

色々と言いたい事がが多いと思いますが。パワポケキャラは出来るだけ出したいです。

第1話 超能力

学園都市

東京西部に位置する完全独立教育研究機関。

あらゆる教育機関・研究組織の集合体であり、学生が人口の八割を占める学生の街にして、外部より数十年進んだ最先端科学技術が研究・運用されている。

また、薬物投与・催眠術・電気刺激など人為的な超能力開発が実用化され学生全員に実地されている。

東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市で、その総面積は東京都の約三分の一に相当し、総人口は約230万人。

それぞれ特色のある23の学区から構成されている。

その内の一つである第7学区に悪の天才科学者、黒野鉄斎の秘密基地兼研究所は在った。

とある高いビル一つをそのまま改造しているらしく、ビルの中は研究施設に居住区や倉庫などがあり、メインの秘密基地は地下に在る。

そこで目覚めた二人は秘密基地の主と仲間に対面していた。

地下の秘密基地で小波と紗矢香はソファーに座り、テーブルを挟んで対面に座る三人 ロボット、人間、バッタ人間と真剣な話をしていた。

それまでに自己紹介などで色々あつたのだが、そこは割合させてもらう。

「それじゃあ博士達は、三年前のある日にこちらの世界に来たんですね？」

小波は向かいのソファーの中心に座る老人、黒野鉄斎に尋ねる。

頭のてっぺんが剥げた白髪頭に、右目に大きな義眼を着けた鋭い眼差し、皺が刻まれた強面に灰色のスーツの上に纏つた黒マントはまさに悪の科学者を髪^{ぱつ}髪^{ぱつ}させる。

年齢は百歳に近いらしいが、まだまだ若々しい活力と霸氣を感じさせる。

「つむ、三年前にワシらはジャジメントに囚われの身になっていたんじやが、突如目の前に光の門が現れてのう。あそこに居ても利用

されて最後に始末されたのがオチじゃったから一か八かこやつらと一緒に賭けてみたんじゃ。そして門を抜けた先に出たのが学園都市だつたんじゃよ」

当時の事を思い出しているのか、物憂げに黒野博士は緑茶を飲むと溜息を付く。

隣にいるロボット・たかゆきも同じ様に溜息を付いている。
どうやらどうやら悲惨な状況だつたらしく。

「俺はこひらに来てから生み出されたから当時の事はよく知らないでバッタ」

元の世界の事をあまり知らないバッタ人間・立花ボボ／＼は呑気に急須にお湯を入れて湯呑みに緑茶を足している。

何も知らないのは幸せな事だというのは本当みたいだな、と小波は気楽そうにしている立花を見て思つた。

「三年前って言つたら、確かブラックホールズ戦があつた時だよね」

三年前に起きた超常現象をよく覚えている紗矢香は当時の事を思い出しながら当時の真相を知る小波に聞くと、彼も真剣な表情で頷く。
「多分そうだと思つよ。当時ジャジメント会長のジオット・セヴェルスがドリームマシンを使って現実をフイクションに侵食させようとカタストロフを起こした時期だからな。その時に色々なアニメや漫画の世界と俺達の世界が繋がつちまつたんだよ」

当時の事を詳しく小波は二人に話す。

当時の事は『運命の三時間』と呼ばれ、今でも語り草となっている。世界中にアニメや漫画などにしかいない怪物が出現して大惨事が起きた。

だがそれを食い止めたのは名も知れぬヒーロー達と子供達だった。

表では当時十一歳だった小波がエースを務めるビクトリー・フィンチーズが世界大会決勝戦後に行われたフィクション達の連合チーム、ブラックホールズに勝利し。

裏ではブラックや茨木和那を中心としたヒーローチームがカタストロフの源であるドリームマシンを破壊するべく、ジャジメントの拠点に乗り込んで、ジャジメントの精銳であるホンフーやエアレイドを打ち破り、何とかドリームマシンの破壊に成功した。

そしてジャジメント会長であるジオットは、小波がブギウギ商店街で知り合った謎のヒーロー・レッドとの一騎打ちに敗れ、カタストロフの頓挫と共に世界から姿を消した。

現実を生きる子供達がフィクションを打ち負かす事で人々の想いと現実の修正力が勝り、フィクションは消え去ったからだ。

そして当時魔球を投げる小学生として有名だった小波と井石は魔球や魔打法を失つてごく普通の野球児に戻つた筈だったのだが・・・。

何故か小波はまた魔球などが扱えるようになってしまった。

ホンフーやヒーローなど色々な人に相談してみたら、当時世界中で魔球や魔打法が扱える子供が現われたのはドリームマシンの力によるものらしいが、小波が魔球を投げたのはドリームマシン発動前であつた事が関係しているらしい。

つまり小波の力は生まれ持つ天然物だつたからだとか・・・・・・。

「・・・ふむ。外でそんな面白い事があつたとは一生の不覚！－」こちらの世界もそれなりに楽しいが、ワシも科学者の一人としてそれほど超常現象を是非この目で見たかった！－」

語り終えて沈黙が流れているところを破つたのはやはり黒野博士だつた。

ワナワナと震えていた所を突然立ち上がり、拳を握り締めて残念そうにしている。

「黒野博士、一応オレッち達もその超常現象で此処にいるんだぜ」

「そうでバッタ！」こちらの世界にはもつともつと凄い事があるかもしないでバッタ！」

「それもそうじゃの！」

仲間一人に慰められて落ち着いた黒野は腕を組んでソファーに座る。

「それよりも私達は元の世界に帰れそなんですか？」

一番聞きたい事を紗矢香は不安そうに尋ねる。

小波も紗矢香も元の世界に家族や友人が大勢いる。

こちらと向こうの時間の進み具合などは分からないが、もしこちらと同じ様に時間が進んでいるのなら大騒ぎになつていいだろ？

そんな一人の不安を消し去る様に黒野博士は胸を張つて自信満々に答えた。

「それについては心配ないぞい！お前さん達と一緒にやつて来たメガネ坊主の技術とこの学園都市の技術にワシの頭脳が合わされば、元の世界に必ず戻してやる！」

「本当ですか！？」

「やつたね！栄一さん！」

元の世界に戻れるという希望を貰つて小波と紗矢香が喜び合つて抱き合つた。

その様子を見ていたかゆきと立花が温かな眼でよかつたなど言つと、黒野博士はこれから話を始めた。

「さてと、まだ上で寝てるメガネ坊主は後にして、お主らはこれからしばらくこの学園都市で暮らさねばならぬから、色々やつてもいい事がある」

「何ですか？」

「日常品の買い物と能力検査でバッタ！」

「それと学園都市だからお前さんは学校に通わなきゃならねえんだよ」

二人の疑問に答えたのはたかゆきと立花だった。

「お前さんはまだ高校生と中学生じゃろうが。戸籍の方はワシ自身が学園都市のトップとパイプがあるから何とかしてやるが、この街で若者が学校に通つていいのは色々と厄介な問題になる事が多い。じゃからお主らはこれから能力検査を受けて学校に通つてもらう。能力の方は二人共最初から生まれ持つてあるよ」
「じやから」からの問題あるまい

ソファーから立ち上がると全員でエレベーターに乗つて、上の能力検査室に向かつ。

その途中に学園都市で研究されている超能力と、小波と紗矢香が持つ力について話していた。

「お前さんが持つてている力は投げる物や持つ物に火や光などの属性を付与して常識外れの力を發揮する事で、お嬢さんの方は自身が願つた事が起きる確率を変動させる事じやつたな？」

「はい、そうです。最初は光属性しか投げれなく、使える回数も限りがあつたんですけど、長年の訓練で全属性を使いたい時に使える様になりました」

「私も似た様なものです。『運命の三時間』が終わつた後はしばらく徐々に能力が弱まつていたんですけど、栄一さんがまた魔球を投

げれる様になつた辺りから、徐々に能力が強くなつてしまつて今では私が思つた通りに確率を変動できますけど、たまに能力が無意識に発動してしまつ事があるのでコレを日常的に着けてます」

紗矢香は小波の友人の伝手で貰つたブレスレット型のESPジャマーを黒野博士に見せる。

「確かにそんな力が無意識の内に暴走したりしたら恐ろしいのう」

「はい。だから私はこの力を滅多に使わない様にしています」

かつて紗矢香の母である天月五十鈴も似た様な力で今の夫を色々と酷い目に遭わせてしまつた事があり、紗矢香自身も自身の力のせいで小波を大怪我させてしまつた事がある。

「・・・・・ そ、う、か、嫌な事を思い出せてしまつたのう・・・・・・」

「いいえ、そんな事があつて今の私がありますから・・・・・」

強い意思を感じさせる眼差しで黒野博士を見る彼女を見て、小波は本当に成長したなど改めて思つた。

・・・・・・・・・・・・

ビルの上の階にある能力検査室に入つた一人は黒野博士からこの学園都市における超能力について説明を受けていた。

「パーソナルリアリティーですか？」

普段聞かない単語に小波は首を傾げる。

「どうやら紗矢香の方もよく理解できていないみたいだ。

「そうじやな・・・簡単に言えばシュレディンガーの猫になるんじやな。少々難しい話になるがこの学園都市では量子力学を超能力が発現する理論としており、能力者は『自分だけの現実』即ちパーソナルリアリティーよつて能力を実現させてている。例えば此処に一本のボールペンがある。」

黒野博士が胸ポケットから一本の黒いボールペンを取り出してみせる。

「これを此処にある何も入つていらない引き出しの中に入れる。そして、此処には何が入っているかね？」

自分達に見えない様に部屋の端にある引き出しに黒野博士はボールペンを入れる

「ボールペンじゃないんですか？」

何を当たり前の事を聞いてるんだ?と小波は思いつつ言つが、

「違ひぞい。ここに入つてるのは鉛筆じや」

「でもさつき入れましたよね?」

紗矢香が確信を持つて聞くと、黒野博士は不敵な笑みを浮かべる。

「そりゃ思つじやろ?じゃが、もしかしたらわしが入れたフリをしてたり嘘を付いている可能性がある。ボールペン50パーセント、鉛筆50パーセント。開けて確認してみなければはつきりと分からん。そしてこの中に別の物が入つていると思った者がいたらどうなる?そしてその可能性を信じてソレを手に入れたら?」

黒野博士の説明に大体理解できた一人はこの世界の超能力とはどういふものなのか知る。

「まともな現実から切り離され、自分だけの現実を手に入れた者を此処では超能力者と呼ぶ。まあ、ワシからしてみれば脳開発で起くる人為的な脳障害みたいなものじや。」

あまり興味無さそうに言つが、黒野博士の眼に映る一人に対しては興味深そうにしている。

「そしてこの世界にはお主らと同じ様に自然に能力へと目覚めた者もいる。そやつらの事を此処では原石と呼んでおる。お主らはこの世界では五十人前後しか確認されていない原石じや。特にお嬢ちゃんの方は高レベルの能力者の可能性が高いからの」

「お主らにも超能力のレベルがあるんですか?」

超能力のレベルの話をされて小波はフィンチーズのファーストだった少女・上守阪奈を思い出す。

世界滅ぼすほどの圧倒的力を秘めた世界最強の超能力者ピースメー
カー エントロピー操る彼女の力は星をも滅ぼせる生きた
核兵器そのものだ。

だがコントロールが一切できずに幾つもの研究所を消した為に封印
されていた所を元ツナミグループ会長・神条紫杏の極秘命令により、
当時紫杏の秘書だった上守甲斐と世界最強の第三世代サイボーグ犬
井灰根によつて不器用ながらも愛されて育てられた少女。

現在は自身の力を少しずつコントロール出来る様になつて、ヒーロー
ーの一人として世界中で人助けをしている。

そして今でも野球を続けてファーストをしている。

「分かりやすく言つとじやな・・・おい・ちょっとアレを持つて来
い！」

「了解でバッタ！」

黒野博士が言つと立花が敬礼して能力検査室を駆け足で出て行く。

どうやらアレで解るほど彼らの絆は深いみたいだと二人は感心した。

そしてすぐに立花は大きなホワイトボードを持つて戻つて来て博士
の横に置くと、黒野博士は簡単にレベルなどについて簡単に書き始
める。

無能力者（レベル0）

測定不能や効果の薄い力。

低能力者（レベル1）

スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力。

異能力者（レベル2）

レベル1とほとんど変わらない程度の力。

強能力者（レベル3）

日常生活において活用可能で、便利と感じる力。

大能力者（レベル4）

軍隊において戦術的価値を得られる程の力。

超能力者（レベル5）

単独で軍隊と戦える程の力。

絶対能力（レベル6）

「神の領域の能力」。

「そして最後に超能力者達最後の到達地點である『SYSTEM』、神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者。これを入ればレベルは全部で八つ何じゃが、この都市の表で認知されているのは超能力者（レベル5）の七人までが最高レベルじゃ」

そして次に黒野博士は現在確認されている超能力者（レベル5）の序列・能力者名・能力名を書く。

それを小波と紗矢香は興味深そうに見た。

第一位・一方通行（本名不明）・アクセラレータ一方通行。

第一位・垣根帝督・未元物質。
ダーラマタ
ルガノ

第三位・御坂美琴・超電磁砲。

第四位・麦野沈利・原子崩し（原子崩し）。
レーリルガノ
メンタルアウト

第五位・食蜂操祈・心理掌握。

第六位・不明・不明。

第七位・削板軍霸・名称不明。

何故か不明の部分があるが、特に気にするような事ではないと言わ
れて気にするのをやめた。

「絶対能力者（レベル6）は居ないんですか？」

「…………現在のところは居ないな。超能力者（レベル5）を
保有している研究所は絶対能力（レベル6）を生み出そう躍起にな
つて馬鹿な事ばかりしておるが、表では上手くいかず認知されてお
らん」

「表では？」

表では認知されていない？

ならば裏では絶対能力（レベル6）が居る事になる。

怪訝な顔で博士を見るが、博士は顎に手を当てて考えると、

「とりあえず今から能力検査をして終わってから話さう。ウチの研
究所に所属している能力者達についてもな…………よし、お前
さんだけこっちに来い」

黒野博士について行つて小波は能力検査室の奥の部屋に入る。

中には色々な計測器具が置いてある縦長に広い部屋だった。

「まずはお前さんの能力検査からじゃ、そこはワシの助手が野球の硬球を用意しておいたから、ソレを思いつきつワシの言つ通りに投げてくれ」

そう言つと黒野博士は部屋から出て行くと、突如博士が出て行った方の部屋の壁が全てクリアになる。

お互い声は聞こえないが、しっかりと様子が見える向いの部屋ではさつき出て行つた黒野博士と左眼に黒い眼帯を着けた見知らない一人の少年が紗矢香達と共に小波の能力検査を見ている。

博士の仲間か助手か？と思つたが後で聞けばいいと思つて田の前的事に集中する。

すると部屋のスピーカーから博士の声が聞こえてきた。

『これよりお前さんの能力テストを行つ。まずは普通に本気でアレに投げてみてくれ』

博士が言い終えると、小波から十メートルほど離れた位置にネットみたいなのが現われる。

「せういえば、近頃どれだけスピードが出るのか測つていなかつたな。一度いいから測つてもうつか！」

野球の硬球が沢山入つたカゴからボールを一つ取ると、小波は肩慣らしに肩を回してから振り被つて全力で投げた。

一筋の流星の如く空を走る硬球はネットのど真ん中に命中すると、奥へと伸びていき、最後にはボールを押し戻した。

『どうやらあのネットは受け止めた物の力を測つて押し戻す緩衝材みたいな働きがある様だ。』

『球速157キロじゃな。まだ高校一年じゃとこに大したもんじゃ』

『当然だよー栄一さんは私のヒーローなんだからー。』

紗矢香の白慢氣な声が聞こえて思わず恥ずかしく思うが、それはそれで小波は前に測つた155キロを更新できてしまつとしていた。

『次は魔球を頼む』

「はい」

返事を返すと小波はカゴからボールを取つて振り被り、頭の中でボールに力を全て込める様にイメージを行い、手に光や力が集まつていく様な感覚を感じながらいつものフォームでボールを投げた。

手からリリースされた硬球は光線の様に真つ直ぐな軌跡を残してネットのど真ん中に当たる。

普通ならまた押し返されて終わる筈なのだが、今回は普通ではない。

ネットに突き刺さったボールは貫通してその向いにある壁へと突き刺さつた。

「えつ？」

想像以上の破壊力に思わず小波は啞然とした。

元の世界ではどんなに力を込めてもあんな事にはならなかつた筈なのだが・・・・・。

『球速測定不能じや』

能力検査室に黒野博士の声が響いた。

第1話 超能力（後書き）

近い内に全て改稿してみようと思います。
前に投稿した時に小説じゃなく台本だといわれましたので。

第2話 学園都市（前書き）

主人公の三人のメガネパパ達を出そうと思つてますが、どう思ひますか？

能力検査を終えた小波と紗矢香は黒野博士から能力検査の結果を聞いていた。

「お前さんが強能力者（レベル3）でお嬢ちゃんが超能力者（レベル5）じゃな。後でちゃんと申請しておくからもうええぞ」

黒野博士がさつき採った能力検査の書類を見ながら言うが、小波と紗矢香は能力検査で見せた自分の力について考えていた。

自身が今まで使ってきた魔球や魔打法は信じられない位に威力が上がっている。

もし人に向かつて投げたら殺しかねない。

小波は能力テストを行つた部屋の端の壁にめり込んでいる幾つ物ボールと、魔打法によつて粉々に碎かれた緩衝材を見て思わず震えた。

「…………榮一さん」

いや、自分の力など大したものじゃない、と思いつつ紗矢香を見る。

彼女は自身の力に不安を感じていいのか顔を曇らせてている。

能力テストで見せた力は元の世界のソレを遥かに超えていた。

紗矢香の能力は『自身の願つた事が起きる確率を変動させる』といふ人が生まれ持つ運勢を操るものだ。

元の世界では宝くじや福引きなどで一等を確実に当てたり外したりなどができるが、それらは彼女の能力の副産物にすぎない。

彼女の本領は願った事が確率で超常現象でも起きる事だ。

かつて彼女は世界の危機に自分と共に立ち向かってくれるヒーローだと小波の事を信じて一緒に平和な街の中を探検している時に『本物の化け物が現われればいいな』、と思つた時に本当に一人の前に化け物が現れて小波は全治八週という大怪我を負つた。

原因が自分の力のせいによるものと解つて彼女は罪悪感で沈み込んだが、小波の熱意によって再び超能力の訓練を始めた。

その結果、彼女は自分の意思で超常現象を起こせるまでになつた。

『運命の三時間』の後は徐々に能力が弱まつてたが、小波が再び魔球を投げた時期辺りから彼女の力も徐々に戻つていい、現在は自身の思うままにコントロールできるが、無意識の内に使つている事がある為にブレスレット型のESPジャマーを常に着けている。

そして、こちらの世界に来て能力検査をしてみたが紗矢香の超能力はこちうで言う超能力者（レベル5）だつた。

どんなに複雑なクジであろうとも任意に大当たりを引き当て、目前で超常現象が起こる確率を上げる事でブラックホールが現われたり、空間がひび割れたりなどした。

実験で元気なモルモットが今すぐ死ぬ事を願つて確率を上げたら、モルモットは突如心臓停止して死んだ。

もはや運命干渉系の超能力だ。

どんな強い敵であろうとも運が無ければ生きていけず、寿命や病気には勝てない。

思つた相手の死ぬ確率を上げてやる事で彼女はどんな相手だらうと殺せる。

モルモットが死ぬ瞬間を見た時の彼女の血の気が引いた顔は忘れられない。

そんな一人を見ていたたかゆきと立花は顔を見合わせると頷いた。

「ところで能力名はどうするんだ？」

「そうでバッタ！折角の能力でなんだから名前を付けるべきでバッタ！」

暗くなつてゐる一人の話題を変えようと話しかけるロボットとバッタ人間。

二人の心遣いに気付いた小波は感謝しつつ話に乗る。

「そうだな・・・なんかかっこいい名前はないかな？」

紗矢香に話を振ると、戸惑いながら必死に彼の能力名を考える。

「え、えーと・・・属性球児とかいいんじゃないかな？」
エレメントフォーム

「うーん・・・ちょっとありきたりなネームでバッタ

「別にシンプルでいいんじゃないか? なあ、坊主?」

「うん。確かに色々な種類の属性が使えるからな。俺は良いと思つよ」

特に自分でも良い能力名が思い浮かばない小波は彼女が考えてくれた属性球児を自身の能力名にした。

「そんで次は嬢ちゃんの能力名だな」

「学園都市のトップ8になるんだからかつこい能力名を考えるでバッタ!」

「確かに他の超能力者(レベル5)って超電磁砲とか一方通行とかだつたよな・・・」

ついさっき教えてもらった超能力者(レベル5)の能力名を思い出しながら小波は紗矢香の能力名を考える。

すると書類の整理を終えた黒野博士がやつて来て、

「ファムファタル運命掌握」というのはどうじゃ? フランス語で運命の女という意味じゃが

「あ、それ私にぴったりかも」

「確かにいいんじゃないか?」

「カツコイイでバツタ！」

紗矢香は自嘲気味に微笑みながら運命掌握を自分の能力名にしよう

と思つた

フランス語で「運命の女」。または、男を
ファムファタル

破滅をせる魔性の女

男連中はその意味を知らずにそれでいこうなどと言つていて、彼女の内心に気づく事は無かつた。

A 5x5 grid of 25 black dots arranged in a square pattern, with one dot missing from the bottom-right corner.

能力検査を終え、小波と紗矢香は学園都市の街で日用品の買い物をしていた。

『戸籍の用意や入学する学校の手続きはしっかりとしておくから買ひ物に行って来るといい』

そう言つて気前よく学園都市の貨幣が沢山入った財布を渡してくれた黒野博士には足を向けて寝られないな、と小波は素直に感謝して

いた。

ちなみに隣で手を繋いで歩いている紗矢香は神桜女子学院中等部の制服だが、小波はいつも着ている白と赤の野球ユニフォームではなく、博士の助手を名乗る黒い眼帯を着けた少年が用意してくれた服を着ていた。

『制服ならともかく、野球ユニフォームなんかで出歩く不審者なんか学園都市にはいねえぞ』とロボットのたかゆきに言われて『尤もだと認めざるを得ない』。

今的小波の服装は白と赤の長袖シャツに白いズボンと赤いジャケット。

頭には自身が通っている高校の野球部の野球帽を被っている。

自身が着ていたユニフォームと似た配色の服を用意してくれたのは、用意してくれた少年の気遣いだろう。

それでも今まで人生の大半を野球ユニフォームで過ごしてきた小波にとって、私服というのは極めて新鮮に感じるが何故か落ち着かなかつた。

「どうしたの栄一さん？」

隣を歩く彼の落ち着きの無むに気づいた紗矢香が不思議そうに小波を見つめる。

「いや、ユニフォーム以外の服なんて滅多に着ないから落ち着かないんだよ・・・」

「あ、確かに私服姿なんて初めて見たかも」

紗矢香自身も三年以上の付き合いだが、彼の私服姿を見た事が無かつた。

何でも彼の父親の一人が『何事も形から入るのが当たり前でやんす！』と言つて野球ユニフォーム以外着せて貰つた事が無いと言つていたが、改めて彼の家がどれだけ異常だったのか分かる。

「それにしても、黒野博士って怖そうな外見してるけど善い人だよな」

「そうだよね、初めて会つた時に私つて悪の組織に捕まつたんだと本気で思つちゃつたもん」

二人は黒野博士達と初対面した時の事を思い出す。

『ワハハハハ！ようこそ我が秘密基地へ！この世の真理を探求せんとする悪の天才科学者、黒野鉄斎とはワシの事よ！』

『オレの名前はたかゆきつてんだ！よろしくな！』

『俺の名前は立花ボボボ～ていうのでバッタ～以後よろしくでバッタ～！』

種族が違う、個性の強過ぎる三人。

恐らく彼らとの出会いは一生忘れる事は無いだろう。

「そついえば・・・もう何人か仲間が居るって言つてたよな?」

秘密基地から出る直前に小波は博士から『帰つたらワシの家族と仲間を紹介するぞい』と言つ言葉を思い出して紗矢香にも確認のため聞いてみる。

「名前とかはまだ聞いていないけど、あの黒い眼帯の人が言つては後二人いるんだって」

「後二人もか・・・多分博士の仲間だから変な個性が強いんだろうな」

「あははは・・・恐らくね」

なにせロボットに怪人がいるのだ、もしかしたら魔法使いやモンスターが居てもおかしくないかもしれない。

「それにしても本当に学園都市なんだな・・・若い学生ばかりだ」

道ですれ違つ人などを見るが、大人が少なく制服を着た子供が多い、と小波は思う。

「本當だよね、清掃ロボや警備ロボが所々にいるし。私達の世界と同じ位に科学が進んでるんじゃないの?」

紗矢香は街の所々に居るドラム缶みたいな形状のロボットを見て小波に聞くが、小波は首を横に振つた。

「いや、少なくとも科学力は俺達の世界の方が少し進んでるよ。超能力はともかくとして、世界のエネルギーバランスを変えたワギリ

バッテリーやタイムマシンの理論とかは、まだじみの世界には無い

い

「どうせしても、この学園都市も知らない事の方が多い場所なんだよね」

「どうな、間違いなく何処かで非人道的な実験をしているに違いないよ」

俺達の世界がそうだったよにね、と小波は憂鬱そうに呟くと柔らかな笑顔を浮かべ、

「とりあえず久しぶりのデートなんだし楽しもうよ。」

「せうだよね！久しぶりのデートなんだもん！」

朱に染まった頬を両手で触れて恥ずかしそうに下向く紗矢香を見て、五十鈴さんより漣さんに似てきたなと思いつつ小波は、彼女の手を引いて歩き出した。

・・・・・

買い物も大体終わって、日も暮れてきた。

街中には下校する学生などが見える中、小波は公園でベンチに座つてくつろぎながら紗矢香を待つていた。

これから学園都市で暮らしていくうえで必要な日用品を買い終えたのだが、その際に店から福引券を数枚渡されたのだ。

自分の力を試すには丁度良いと思つて紗矢香は、今日一日荷物持ちをしてくれた小波に此処で待つている様に思つて福引場へと向かつた。

『絶対に大当たりを当てて来るから待つてね!』

自信満々に言つた彼女の事だ、間違いなく特等か一等を当ててくるだろう。

そう思いつつ小波はスーパーで買つた紙パックのムサシノ牛乳を呑気に飲んでいた。

「何か身体を動かしとかないと落ち着かないな」

手で野球の硬球を弄びながらこれから練習とかどうしようと小波は考える。

元の世界では野球部での練習は勿論、実家でのカンフー映画みたいな練習場があつたおかげで野球の練習には困らなかつた。

だが学園都市には持つて来た野球道具と着ていた練習着しかない。

黒野博士に何か作つてもらおうかな、などと危ない事を考へているときだつた。

「ええい！ちくしょう、不幸だつ……」

という若い男の大きな嘆き声が聞こえて小波は振り向くと、黒い学生服を着たツンツン頭の同じ年位の少年が柄の悪そうな輩達に追いかけられている。

その数は實に八人。

少年は逃げ足も速く逃げ慣れているのか男達は捕まえる事が出来ずにいる。

だが、柄の悪い輩の数は揃つているのだから当然捕まるのも時間の問題である。

すぐに回り込まれた少年は柄の悪い連中に取り囲まれた。

恐らくあのままだとリンチされるだろう。

「しようがない。どっちが悪いのか確かめてから助けてやるか

ベンチから立ち上がり、飲み終わった牛乳パックをゴミ箱に捨てる

と小波は拳を鳴らしながら少年達の元へと向かつた。

・・・・・・・・・・・・・

黒い学制服を着たツンツン頭の少年、上条当麻は柄の悪い八人の男達に取り囲まれながら自分の不幸体質を嘆いていた。

ちょっと柄の悪い男が一人、気弱そうな中学生の少年をいじめていたから助けてやろうと思つて声を掛けたのが運の尽きだつた。

一対一ならともかく、いきなり七人も増えて一対八なんて実力云々以前に『無理』だ。

当然逃げる。

裏路地などを走り抜けて、相手が諦めるまで逃げ続ければ大丈夫な筈だったのだが、今日に限つて異常にしぶとい連中の様だ。

頭を使って回り込まれ、路地に挟み撃ちで追い込まれて逃げ場無し。

絶体絶命。

これを不幸と言わずしてなんと言つ！

「へへへへ。ようやく追い込んだぜ」

「お兄さん達、ちょっと小遣いに困つてゐるからお金くれたら許してあげるかもよ」

追い込んだ獲物に対して絶対的な優位を感じてゐる男達は上条を見下した目で見て囁つ。

だが上条は開き直つた様に堂々と男達にビシッ！と指を突きつけ言い放つた。

「誰がお前らなんかにやるかよ！金が欲しいんならアルバイトでもして手に入れろよ！上条さんにはな、弱い奴から金を巻き上げようとする捻くれた奴らに渡す金なんか無いんだよ！」

（あいつ囁つなー！？）

影で上条の堂々とした姿を見ていた小波は今時珍しい正義漢だと感嘆しながら内心拍手しつつ彼らに近付いた。

「そいつの囁つ通りだ。金が欲しいんならちゃんと働いて自立してから言えよ」

突如現われた少年を上条は怪訝な顔で見る。

赤いジャケットに白いズボンの同年代位の少年。

頭には白赤の野球帽を被り、短く刈つた黒い短髪に強く熱い意思を感じさせる眼差しをした、それなりに整つた顔立ち。

背は一七〇後半位で高く、スマートだが引き締まつた体をしている。

「なんだてめえは？」

「こいつと同じ正義の味方気取りか？」

柄の悪い輩達全員の目付きの悪い視線が小波に集中するが、小波はこの程度の奴らに物怖じする男ではない。

生まれてすぐに三人の父親から野球にあまり関係ない様な英才教育を受けており、父親の中でも武闘派の落田からは喧嘩の仕方などを教わっている。

おまけに十一歳の時に正真正銘の殺し合いで自ら参戦して、ジオットの部下である第四世代サイボーグ・マゼンタやジナンダに殺され掛けた事もある。

余談だが中学生の時に行われた野球の合宿で、合宿地の小森寺ではなく少森寺という『漢たちが己の精神と肉体を極限まで鍛え上げる地上最強の場所』に間違つて入つてしまい、四十日修行を無理矢理課された事もある。

その際に寺門男を始めとした師匠達にしきにしごかれ、最終日に行われた少森寺ハ連闘を命懸けでクリアして生還した。

それを聞いたホンフリーから野球をやめて弟子にならないかと言われた事すらもある。

勿論断つたが。

まあ、单刀直入に言えば小波はたかが不良程度に負ける事はない。

「俺はあの入達と違つてヒーローなんて大層な存在じゃない」

ヒーローという言葉は世界中で影から人助けをしている阪奈やグラックさん達に相応しい。

「俺はただの野球少年だ」

不敵な笑みを浮かべながらそう言つと小波は動いていた。

先手必勝！相手が反撃する間も与えない。

両手両足を思いっきり使って蹴つて殴つて、一人一人を確実に一撃で戦闘不能にしていく。

全員が倒れるまで十秒も掛からなかつた。

「おい！誰か来る前にズラかるぞ！」

余りの強さに上条は呆然としていたが、声をかけられてすぐに我に返つた。

「お、おうーありがとな！」

上条はその場から立ち去ると、小波も紗矢香が待つてているかもしない公園へと戻つていった。

・・・・・・・・・・・・・・

小波が人助けをしていたその頃

紗矢香は福引場の前で随分長い時間並んでいた。

人数は少ないのだが、運悪く紗矢香の前の人気が沢山福引券を持つていたからだ。

「ああ～つーgeコ太が～つ！」

ベージュ色のブレザーに紺系チェック柄のプリツツスカート姿の女学生が残念そうに頃垂れる。

どうやら目の前の肩まである茶髪の可愛らしく勝氣そうな少女は五位のgeコ太抱き枕が欲しいらしい。

だが残念ながら彼女は一度も当たりを引く事が無く全ての福引券を使い切ってしまった。

「ざんねんでしたね」

福引のお姉さんがしょんぼりとする少女に残念そうに声を掛けると、少女は福引場からとぼとぼと去つて行こうとするが、紗矢香は苦笑しつつ少女の腕を取つた。

「ちょっと待つてください。これから私が福引をするんですけど、もしかしたら引き当たっちゃうかもしれないんで、その時は貰つてくれませんか？」

「え、いいの？」

頃垂れていた少女は顔を上げて紗矢香を見る。

「はい、勿論！」

紗矢香は笑顔でそう言つと福引券を一枚、福引のお姉さんに渡す。

少女が期待を込めて見守る中、紗矢香は右手首に着けたブレスレット型のESPNジャマーをOFFにすると自身が五等を引き当てる確率を念じる事で極限まで高めて福引のガラガラを回す。

三回転させた時だった。

ガラガラから赤い玉が出てくる。

赤い玉は五等、すなわち景品は少女の求めるゲコ太抱き枕。

それを見た福引のお姉さんは「当たりです！」鈴を鳴らし、少女は喜びのあまりに紗矢香に抱き付いた。

「やつたあ～っ！ ありがとう～。」

「いいえ、運が良かつただけですから」

「うして少女は目的の品を受け取り、紗矢香は次の福引で一等の豪華絢爛すき焼きセットを引き当てた。

「本当にありがとうございました、そつだ自己紹介がまだだつたわね、私は御坂美琴。常盤台中学の一年生よ」

茶髪の少女、御坂美琴は機嫌良さそうに自己紹介すると、紗矢香と握手する。

「私の名前は天月紗矢香です。紗矢香って呼んでください。今度常盤台中学に転入する事になつている一年生です」

「なら私の後輩ね！何か困つた事があつたら何でも言つてね、このお礼は必ずするから！」

美琴が握手しながら軽くウインクすると、紗矢香は微笑みながら頷いた。

「はい、宜しくお願ひします御坂さん」

「それじゃあまたね！」

手を振つて去つて行く美琴を見届けると、紗矢香は景品を持つて小波が待つ公園へと嬉しそうに笑顔を浮かべて戻つて行つた。

第2話 学園都市（後書き）

主人公と紗矢香が強すぎると思うかもしませんが、これ位じゃないとチート共相手に生き残れない様な気がします。

それと今の時期ですが、上条や御坂が進級したばかりの春です。

第3話 黒野ファミリー（前書き）

オリキヤラを何人が出します。
理由は原作キャラと違つて殺したい時に都合よく殺せるからです。
それと小波がレベル3なのは作中で徐々に説明していきます。

第3話 黒野ファミリー

「ただいま」

「今戻りました」

「お帰りでバッタ！」

秘密基地へと続くエレベーターから出て挨拶をすると、一人を待つていたのか立花が迎えてくれた。

日が暮れて、空に月と星々が見え始める頃に一人は黒野博士の秘密基地へと戻った。

第七学区のとあるビルの地下に作られた自称 悪の秘密基地は一見して何処にでもある無機的な広い地下倉庫に家具などを始めとした電化製品が置かれているだけのプライベートルームに見えるが、部屋の四隅にパスワードと特殊なカードキーが無ければ開けられない頑丈そうな自動扉があり、その向こうにはたかゆき曰く黒野博士のラボラトリ、武器や食料などがある倉庫、秘密の脱出口、気分転換の娯楽室があるらしい。

そしてこの秘密基地に入るのも、博士から渡されたカードキーと教えられたパスワードが無ければ入れない様になつていて。

「さあさあ、とりあえず荷物を適当な場所に置くでバッタ」

「ありがと、立花さん」

「どう致しましてでバッタ」

手に持っていた買い物袋を渡しながら紗矢香は親しく手伝ってくれる立花に礼を言つと、立花は穏やかに笑顔で返す。

出会つたばかりの当初は初めて見るバッタの怪人にどう接していいのか分からなかつたが、彼の親しげな優しさを知ると共に普通に接する事が出来るようになつていた。

「博士とたかゆきはどうしたんだ?」

秘密基地の中に一人の姿が無い事に気付いた小波が立花に聞くと、
「たかゆきの奴なら博士の頼みで一人が通う学校に書類を渡しに行つてゐるバッタ。それで博士は今、生徒会長リーダーと一緒にこの学園都市で一番偉い人に会いに行つてゐるバッタ」

「リーダーって誰だよ?もしかして俺に服を用意してくれた眼帯の人か?」

博士と一緒にといふ言葉で小波は博士の助手を名乗つてゐた、黒い眼帯を左眼に着けた少年を思い出していた。

すると、立花はコクリと頷いて肯定する。

「そうでバッタ。あいつがこの学園都市にいる学生の頂点に立つ生徒会長でバッタ!みんなからは生徒会長と書いてリーダーと呼ばれているカッコイイ男でバッタ!」

この学園都市にいる生徒の頂点に立つ男。

そう言わると一人は納得した様に呟いた。

「そう言わればそんな感じの人だつたよね」

「確かに・・・あいつが生徒会長か・・・・・・」

小波は初めて彼と会つた時の事を腕を組んで思い出す。

服を持って来た。サイズは少々大きめのを選んだからで
んなに悪くない筈だ。

たつた一言だけ穏やかな表情で言つて、目の前から去つて行つた同
年代位の少年。

ストレートの黒髪に、左眼に黒い眼帯を着けた真つ直ぐで理知的な
隻眼。

男前に整つた顔立ちに、小波よりも背が高く引き締まつた体付き。
堂々とした佇まいからは同年代とは思えないほどの頼りがいを感じ
させられた。

「また会つたら服の礼を言つておかないとな」

「それならもうじき博士と一緒に帰つて来る筈でバッタ」

「なら、その時にでも言つか

小波はそう決めると一人呟いて近くにあつたソファーに座つた。

「そういえば、ここの中さんは食事をどうじつるの?」

何を食べているんだろ？と疑問に思つた紗矢香が立花に聞く。

見た目で判断してはいけないと思うが、黒野博士を始め、たかゆきや立花には料理なんか出来る様には見えない。

もしかしたら、あの生徒会長が作つているのだろうか？

紗矢香はこれまでの事からそう思つていると、立花は人差指を立てチツチツチツと口で鳴らし、

「博士の娘さんが全てやつてくれてるでバッタ。だから安心でバッタ」

「黒野博士に娘なんていたのか？」

「お孫さんじゃなくて？」

初めて聞いた事に小波と紗矢香が疑問に思いながら聞くと立花は頷いて肯定する。

「少しちょつと違うでバッタ。博士には元の世界に息子達しかいないのでバッタ。こちらの世界で博士が拾つて育てている義理の娘でバッタ」

「・・・ふうん」

立花の説明に納得した二人だが、すぐに驚く物を見せられる。

「ちなみにこれが博士の息子達でバッタ」

立花が近くにある本棚から一冊のアルバムを取り出すと、その中から一枚の写真を抜き出して小波に手渡して見せる。

「どれどれ、と二人は興味深く写真を見ると、思わず我が目を疑う様なものが写っていた為、一度目を腕で擦つてからもつ一度凝視するが間違いない。」

「写真は学校で撮る様な集合写真みたいになつており、写真の中央に今とあまり変わらない黒野博士がいて、周りに野球のユニフォームを着た博士の息子達が一列十人で四列に並んでいる。」

「すなわち博士の息子は四十人近くいることになる。」

「どんだけ子供がいるんだよ！？」と普通なら驚いて思つかもしれないが、小波と紗矢香が真に驚いているのは、

「何で同じ顔が四十人もいるんだよ？！」

「予想外の事に思わず叫ぶ小波。」

横から覗き込む様に見ている紗矢香も眼が点になつていて、

「ちなみに博士の息子の長男、次男、四男は夏の甲子園で優勝した事があるそうでバッタ！」

「マジかよ？！」

自分の事の様に誇りしげに語る立花の言葉に小波がまた驚く。

「 本当にバッタ。これが証拠でバッタ 」

再びアルバムから一枚の写真を抜き出して小波に見せる。

証拠を見せられた小波はそれを見て信じざるを得なかつた。

そこに写っていたのは夏の甲子園で全国制覇を果たした日の出高校の野球部員達。

甲子園のグラウンドで泥だらけになりながらも、みんなが輝かんばかりの笑顔を浮かべている。

そして黒野博士の同じ姿をした三人の息子もその中にはいた。

だがさらに驚く事があつた。

よく見ると小波はこの写真を見た事がある。

「 これって栄一さんのお父さんだよね・・・ 」

紗矢香が写真に写るメガネ少年を指差す。

「 うん。間違いない山田父さんだね 」

指差した先には小波の三人いる育て親の一人である若かりし頃の山田平吉が写っていた。

それだけではなく、何度も会つた事がある人が何人もいる。

例えば山田父さんの妹の夫である元プロ野球選手を始め、元ジャジ

メント日本の社長で元大神モグラーズのエースだつた大神博之。

他の人達も山田父さん達と日の出島に行つた時に会つてゐる。

「なあ！ 本当だつただろバッタ！」

「本當みたいだな・・・。でもこれ、どう見てもクローンだろ?」

「これだけ似てたらそつとしか言えないよ」

どうやら本当に世界征服を企んでいたみたいだ、と二人は黒野博士の人物評価を改めた。

その後一人は写真を返して、買って来た荷物の整理をしていた。

A 4x5 grid of 20 black dots arranged in four columns and five rows. The dots are positioned at the intersections of a grid of 5 horizontal and 6 vertical lines. The grid is centered on the page.

その部屋には窓がない。

ドアも無く、階段も無く、エレベーターも通路も無い。

第七学区にある建物として全く機能する筈のないビルは、大能力者

（レベル4）である空間移動がなければ出入りする事もできない最高の要塞だった。

そんな、核シェルターを優に追い越す強度を誇る演算型・衝撃拡散性複合素材（カリキュレイト＝フォートレス）のビルの中に、黒野博士と学園都市に存在する全生徒の頂点に君臨する生徒会長の姿はあつた。

室内と呼ぶにはあまりにも広大な空間には、一切の照明がない。

それなのに部屋の中は星のような光に満たされていた。

部屋の四方の壁を覆い隠すように設置された無数のモニタやボタンが瞬く光である。

大小数万にも及ぶ機械類からはさらに数十万にも及ぶコードやケーブル、チューブ類などが伸びて、血管の様に床を這い、それらは全て空間の中央へと集まっていた。

部屋の中央には巨大なビーカーがある。

直径4メートル、全長10メートルを超す強化ガラスでできた円筒の器には、弱アルカリ性培養液を示す色彩の赤い液体が満たされている。

そのビーカーの中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さまに浮いていた。

銀色の髪を持つ『人間』は男にも女にも見えて、大人にも子供にも見えて、聖人にも囚人にも見えた。

その『人間』の名はアレイスター＝クロウリー。

この学園都市のトップに君臨する統括理事長である。

生命活動を全て機械で補い、計算上は一七〇〇年にも及ぶ寿命を持つとされる男と向かい合つ形で黒野博士と生徒会長は一人の人間と対面していた。

二人が此處に来るのは慣れた事で、今更物怖じをする必要が無い位に堂々としているが、みんなから生徒会長と呼ばれる男の腰には一本の刀を帯びていた。

その理由はビーカーの傍らに佇んでいる一人の黒いフード付きの外套を纏つた黒尽くめの男にある。

外套のフードを深く被つていて顔の全像は見えないが、東洋系の口許をしている事から日本人であると思われる。

黒野博士や生徒会長にとつてはビーカーの中に居る奇異な人間よりも遙かに危険な人物だと嫌でも感じるしかなかつた。

それほどまでに男の存在は邪悪だつた。

その姿から醸し出される悪意に触れているだけで頭がおかしくなりそうな錯覚すら覚えるほどの何かを男は無意識に発している。

それが何なのか黒野博士と生徒会長には分からぬが、とてつもなく不愉快に感じる。

リーダー

リーダー

リーダー

「此処に来た用件は分かっている。また随分面白い者達がやつて来たものだ・・・」

「ならば、あやつらはワシの研究所所属の能力者といつ形で保護させてもらひつや」

「・・・ふむ、別に構わない。プランには何の障害も無いし、もしあつたとしても僅かな誤差で済む。・・・それにしても実に興味深いものだ。あの少女の運命掌握（スマートアタル）といい、あのロボットとメガネの男の技術といい、もし私自身が自由に動けるならば自ら調べたいものだ」

新しい玩具を見つけた子供の様にアレイスターは喋ると、黒野博士は怪訝な顔になる。

それを見たアレイスターは口許に軽い笑みを浮かべ、

「安心するといい。君と私の仲だ、お互（リーダー）いが交わした契約を破らない限りは」

「わしとお主は同志とこう事じやな」

お互（リーダー）い人の悪い笑みを浮かべるなか、生徒会長はビーカーの横に佇む男に注意を向けていたが、黒尽くめの男は何も喋らずに口許に歪んだ笑みを浮かべて生徒会長を見ていた。

まるで頭の中で嫌な事を想像されている様な気がして、不愉快に感じる。

今すぐにも問答無用で斬り殺したい衝動に駆られるがそれはでき

ない。

奴はまだ自分に何もしていないのだから。

「それではこれからもお前さんの障害にならん程度に遊ばせてもらひうぞ」

「構わない。君はこの学園都市にいる科学者達の中でも極めて優秀な男だ。また面白い発明品を期待している」

いつの間にか話し合いは終わっていたらしく、去つて行く黒野博士の後を追う様に生徒会長は続く。

その時だった。

「面白い左眼を持っているようだな」

今まで黙っていた男が生徒会長に話し掛ける。

立ち止まり、その空間に全員が注目する中で生徒会長は特に気にした様子も無く、

「羨ましいか?」

と左眼の眼帯を指差しながら黒尼くめの男に聞く。

いや、と男は答えると、黒野博士と生徒会長は何も言わずに去つて行つた。

一人だけ残された静かな空間に沈黙が漂うなかで男は肩を竦めると、

「いつたい何者だい彼は？」この学園都市の中でも特に反則的な存在みたいだが・・・」

と学園のトップに気安く話し掛ける。

「　　全て分かっているくせに聞かないでもらいたいな

「沈黙が嫌だつたから聞いてみただけさ」

素つ気ない反応に男は不敵な笑みを浮かべた。

・　　・　　・　　・　　・　　・
・　　・　　・　　・　　・　　・
・　　・　　・　　・　　・　　・
・　　・　　・　　・　　・　　・
・　　・　　・　　・　　・　　・
・　　・　　・　　・　　・　　・
・　　・　　・　　・　　・　　・

時刻が午後の7時を回り、さすがにお腹が空いてきた小波と紗矢香は秘密基地で夕食の準備をしていた。

いつもはまだ見ぬ博士の娘が作る筈なのだが、上の階にいる全ての元凶であるメガネ男・カメダの看病をしているらしく、代わりに今晩の夕食は紗矢香が作る事になった。

今晚の夕食は紗矢香が福引で当たった豪華絢爛すき焼きセツトがある事からすき焼きを作っている。

キッチンからすき焼きの良い香りがしてくるなか、小波と立花はただ待っているのも悪い気がして秘密基地の掃除をしていた。

「ふう~。これでいいバッタ」

「少しば綺麗になつたな」

一通り掃除機で掃除し終えた二人は満足気に辺りを見回す。

「俺は食事の準備をするから小波は七階の居住区の一一〇一号室にいる博士の娘とメガネの二人を呼んできて欲しいでバッタ」

「分かつた。ちょっと行って来る」

立花に頼まれて、エレベーターに乗り込んで七階に向かい、一一〇一号室の前まで来た小波はドアをノックする。

すると中から。

「開いているから入つて来て下さい」

と女性の声が聞こえて、小波は失礼しますといつと中に入る。

まるで病室みたいな部屋の中にはベッドの上で体を起こしている中年のメガネ男・カメダと白く華美なデザインの着物を着た高校生位の少女だった。

カメダの方は元の世界で見たダースベイダーみたいなコスプレの服ではなく、若草色のパジャマを着ている。

そして部屋に入ってきた小波を見た瞬間、驚いた様に指を差し、

「あつー？お前はあの時の危険球野郎でやんすねー？」

カメダが驚いて敵意を表しているが、小波は別の事を考えていた。

世の中自分に似た人間は三人いると言われているが、ウチの父親達は知っているだけでも五人以上はいる。

父親達とそつくりの聞き慣れた声を聞いて何故か落ち着く事に気付いた小波はホームシックかなと思つた。

「とりあえず聞きたい事は色々あるけど、下で晩御飯の準備ができるから降りて来てくれだつてさ」

敵意？き出しのカメダとベッドの傍らにある椅子に座つている博士の娘らしき少女に言われた事を伝える。

すると、真っ直ぐなセミロングの茶髪に優しげな眼差しをした清楚で可愛らしい少女は立ち上がりて礼儀正しく自己紹介を始めた。

「どうも始めてまして、小波栄一さんですね。ミサカは黒野博士の娘で黒野ミサカと言います。ビツビツ見知り置きを」

「あ、どうもミサカ」

礼儀正しう一礼するミサカに小波も見習つて一礼を返す。

「おこいらを無視するなでやんす！」

無視されて手元にある枕を小波に投げつけるが左手であつたりキャツチされる。

「それだけ元氣なら何でも食えそうだな。立てないなら手を貸そうか？」

妙な事になつたのも全て「オイツのせいだが、自分の父親に似ているせいいか妙に親近感を感じて、小波は親しげに接するが、

「ええい！お前の手なんて借りないでやんす！」

初対面に魔球で「テッ」とボールを食らわせた事に腹を立てているらしい。

カメダはベッドから立ち上ると、ズンズン、と力強く床を踏みながら部屋の外に歩いていこうとするが、

「何処に行けばいいんやんすか？」

とミサカに恥ずかしそうに尋ねた。

その様子を見た小波は父さんそつくりだと苦笑し、ミサカは口許に微笑を浮かべる。

「カメダさんは秘密基地に向かつ為のカードキーも無く、パスワードも知らないからミサカが案内致します」

ミサカがカメダの左手を取ると歩き出し、カメダは自分の手と手を繋ぐ少女の手を見て感激していた。

（うおお～っ！？女の子自ら手に取つてもらえるなんて夢みたいでやんす！…）

彼の人生は敗北と失敗の歴史で埋め尽くされている。

とあるファンタジーの世界では勇者に敗れ、とある忍者達がいる戦国時代の世界では忍者どもに敗れ、とある宇宙連邦がある世界ではとあるスペースキャプテンに敗れた。

その他数々の世界を渡り歩いたが、いずれも敗れて失敗した。

そしてどの世界でもカメダは小波に似た男に敗れてきた。

カメダが小波を敵視しているのはそのせいである。

そんな敗北と失敗の人生を送つて来た彼は、何気に親しい女性関係が一切無かった。

そんな彼の前に現れた少女の優しさにカメダが感激しない筈が無い。ミサカに手を引かれて浮かれながら歩いていくカメダの後姿を小波は苦笑しつつ見ながら続いた。

・・・・・・・・・・・・

小波達が秘密基地の戻つて来た時には既に食事の準備が完全に終わつていた。

キッチンの方にある食卓には、黒野博士、立花、たかゆき、リーダ生徒会長、紗矢香の五人が着いており、小波達三人を待つていた。

「やつと降りてきたか」

「早く席に着くでバッタ」

どうやら小波達が来るまで待つていてくれたらしく、たかゆきと立花が空席指差して急かす。

「遅れてすいません」

謝りながら紗矢香の隣の席に座ると、小波は紗矢香の様子がおかしい事に気付く。

お化けでも見た様に目を見開き、ある人物を見ている。

「……どうして？……何で御坂さんが此処にいるの？」

「？」

紗矢香の言つてゐる意味が分からず、小波は怪訝な顔で紗矢香の視線の先にいるミサカを見る。

「ああ、そういうことですか。あなたはお姉様に会つたのですね。ちなみにミサカは御坂美琴ではなく黒野ミサカといいます。今後とも宜しくお願ひします」

柔らかな微笑を浮かべながら黒野ミサカはそう言つて、小波の左隣に座り、カメダはその左隣に座る。

「おおつ！…すき焼きでやんすか！？ オイラ大好物でやんす！…！」

食卓の中心にある鍋の中でグツグツと煮える牛肉や野菜の匂いを嗅いでカメダは年甲斐も無くはしゃぐ。

その一方で紗矢香は納得できずに怪訝な表情でミサカを見ているが、ミサカ本人は困った顔で苦笑している。

紗矢香は昼間に会つた御坂美琴を高校生位まで成長させた姿のミサカを見ながらとある事を思い出していた。

それはクローン技術。

つこさつき、立花が見せてくれた黒野博士の息子達の写真。

同じ姿の人物が四十人近くもいたが、いくら兄弟であつてもありえない事だ。

だがクローンと言われば納得できる。

恐らくミサカは御坂美琴のクローン人間。

そうだと考えれば似過ぎてるのは当たり前の事だろ。

彼女が何なのか知りたい衝動に駆られるが、紗矢香はそれを聞く事ができなかつた。

聞けば彼女を傷付ける様な気がしたからだ。

「とつあえず食事にしよう、天月さんがせっかく作ってくれたんだ。話なら食べながらで構わないだろ？」、ですよね博士？

「まあのう、特に隠すような事じやないからいいじゃう？」

紗矢香の内心に気付いた黒野博士と生徒会長がそう言つと、紗矢香は黙つて頷いた。

「それじゃあ、一人だけちょっと野暮用でいいが、食事を始めよ

う

生徒会長が手を合わせると全員が同じ様に動く。

リーダー

「いただきます！」
「「「「「「」」」」

食事前の挨拶と共に黒野一家の夕食が始まつた。

第3話 黒野ファミリー（後書き）

あれから黒野兄弟はどうなったんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0565ba/>

とある野球少年の異世界目録

2012年1月8日20時47分発行